【33】

氏　名（本籍）	久保田（くぼた）　健（けん）　市（いち）（神奈川県）
学位の種類	博　　士（心　理　学）
学位記番号	博　甲　第　2229　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	社会的アンデンティティと集団間差別行動 —最小条件集団パラダイムによる実験的研究—

主　査	筑波大学教授	博士（心理学）	吉　田　富二雄
副　査	筑波大学教授		堀　　洋　道
副　査	筑波大学教授	文学博士	山　本　眞理子
副　査	筑波大学助教授	教育学博士	徳　田　克　己

論文の内容の要旨

本論文は，社会的カテゴリー化（自己や他者を所属集団に分けること）が個人の集団間差別行動（内集団びいきー外集団差別）に及ぼす影響を検討した一連の実験研究である。

従来，集団間差別の問題は個人内要因や対人関係の観点から検討されてきた。これに対し，Tajfel（1978）は，集団所属の認知過程の役割を重視し，最小条件集団パラダイムと呼ばれる実験研究の手法を開発した（Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971）。しかし最小条件パラダイムを用いた集団間差別の研究はヨーロッパを中心に行われ，日本における研究は極めて少ない，本論文では，以下の問題設定を軸に，社会的カテゴリー化が集団間差別行動に及ぼす影響を検討した。

（1）日常的に見られる多様な社会的カテゴリーを分類・整理し，社会的カテゴリーの性質上の差異が集団間行動に及ぼす影響について検討する。

（2）「少数派ー多数派」という勢力格差を集団間関係に導入する。

（3）集団間の移動と集団成員性の変化というダイナミクスを集団間関係に組み込み，所属集団を変化させた転向派に対する差別行動を検討する。

本論文は，序論・実証研究・総括の3部から構成され，9つの実証研究が含まれている。

第Ⅰ部　序論

第1～2章従来の集団研究・集団間差別研究の概観

第3章　社会的アイデンティティ理論の概説

第4章　従来の最小条件集団研究の概観

第5章　本論文の目的

第Ⅱ部　実証研究

第6章　社会的カテゴリーの分類（研究1）

第7章　少数派ー多数派の社会的カテゴリー化と集団間差別行動（研究2・3）

第8～9章　集団性の意識化と集団間差別の関連（研究4・5・6）

第10～11章　集団成員性の変化と転向派の問題（研究7・8・9）

第Ⅲ部　総括

第12章　全体的考察

第13章　社会的アイデンティティ研究の展望

次に，各部の概略を述べる。

第Ⅰ部　序論

第1章では，成員間の相互作用と相互依存性を重視した従来の「集団」の概念が，国家や民族のような大規模な「社会的カテゴリー」において生じる集団間差別の問題を扱うのに不適切であることを指摘した。第2章では，従来の集団間差別に関する諸説を概観した。そして，それらが個人内要因や対人関係の要因に基づく理論であり，不十分な点を論じた。これらの批判に基づき，第3章では，「社会的カテゴリー」として集団をとらえる社会的アイデンティティ理論を詳細に論じた。続いて第4章では，社会的アイデンティティ理論の実証的基礎をなす最小条件集団研究の成果を概観した。最後に第5章で，先行研究の問題点を整理し，本論文の目的を提示した。

第Ⅱ部　実証研究

人種・民族から無作為な分類クラスまで，社会的カテゴリーは多様である。しかし，従来の研究では社会的カテゴリーの性質上の差異が扱われていない。そこで第6章では，社会的カテゴリーの分類を試みた。その結果，社会的カテゴリーは，「有意味性」および「組織－個人の選好」の2次元からとらえられ，(a) 符号による社会的カテゴリー，(b) 価値性に基づく社会的カテゴリー，(c) 組織による社会的カテゴリーの3つに分類された（研究1）。

得られた社会的カテゴリーの基本類型に基づき，第7章では，くじ引き（符号・偶然性）と社会的態度（価値性）をカテゴリー化基準に用い，最小条件集団パラダイムによって少数派と多数派の集団差別行動を検討した。その結果，くじ引き（偶然性）によってカテゴリー化されたとき，少数派は内集団びいきを示したのに対し，多数派は内集団びいきを示さなかった（研究2）。一方，社会的態度によって少数派と多数派を設定したときには，少数派も多数派も，価値観の対立を媒介にして，ともに有意な内集団びいきを示すことが明らかにされた（研究3）。

社会的アイデンティティの意識化と集団間差別行動の関連性を検討するために，第8章では，集団性を意識した程度を測定し，両者の関連性を検討した。その結果，偶然性によって分類されたとき，少数派は多数派よりも強く自身の集団性を意識し，少数派のみが内集団びいきを示した。さらに，少数派でのみ，内集団びいきと集団性を意識する程度の間に正の相関が見られた（研究4）。これに対し，社会的態度でカテゴリー化された場合，少数派と多数派で集団性を意識した程度に差は見られず，ともに内集団を有意にひいきしたことが示された（研究5）。さらに第9章では，少数派および多数派の集団成員に加え，自身の社会的アイデンティティが関与しない第三者の集団間差別行動を測定した。集団認知の点では，集団成員だけでなく第三者もまた，相対的に少数派をポジティブに多数派をネガティブに知覚していた。これに対し，得点分配行動では，少数派および多数派成員のみが有意な内集団びいきを示し，第三者はどちらか一方を明確にひいきすることはなかった（研究6）。

集団成員性の変化の問題に関して，第10章では集団所属を変化させた転向派に対する集団間行動が検討された。一般に，転向派は少数派および多数派の双方から差別されることが明らかにされた（研究7）。また，転向派に対する差別行動は，転向という行為の解釈（原因帰属）の仕方が影響を及ぼすことが示唆された。このような結果は，集団サイズの格差が拡大した状況で，明確に示された。一方，格差縮小条件では，現在の内集団－外集団の区分に基づいてひいき/差別が見られるようだった（研究8）。第11章では，集団間の移行可能性が，少数派および多数派の集団間行動に与える影響が検討された（研究9）。

第Ⅲ部　総括

はじめに，第12章で，第Ⅱ部の実験結果をまとめ，得られた知見を明確にした。そして，本論文の知見をもとに，社会的アイデンティティ理論とは異なる立場（類似性，返報性の予期）からなされた最小条件集団実験にかかわる議論を批判的に検討した。そして，第13章では，今後検討されるべき問題と，今後の日本社会における集

団間関係の問題がどのように展開されるのか，その可能性について論じた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

現代の日本社会では，価値観の多様化・相対化の進行とともに，民族や文化的背景の異なる人々の割合も年々増加している。それに伴い，集団所属の意識に基づく社会的アイデンティティと，集団間関係の問題は今後ますます重要性を帯びてくると予想される。社会的アイデンティティ理論は，集団所属の意識に基づく集団論である。今日的なテーマを含むが，本邦における研究は極めて少ない。そうした中で，本論文は，一連の最小条件集団実験に基づき，集団性の意識が集団間行動に及ぼす影響を体系的に検証した点で，その意義は高く評価される。

特に，（1）社会的カテゴリーを分類し，符号に基づく社会的カテゴリー（偶然性）と価値性に基づく社会的カテゴリー（社会的態度）が，集団性の意識に異なる効果を及ぼすこと，（2）「少数派－多数派」という集団サイズの格差自体もまた，集団性の意識に異なる効果を有することを示した点，また，（3）集団性の意識と集団間差別の関連性を明らかにし，第三者集団との比較など多面的に検討している点は，意義深いといえる。さらに，（4）集団成員性の変化を導入して問題をダイナミックに展開し，転向派が一般に差別されやすく，転向の解釈（原因帰属）が差別の強さに影響することを実験的に示した点は独創的である。そして，（5）類似性や返報性など他の観点に基づく議論を再検討し，その限界を明らかにしている点も重要である。こうした一連の研究は多くの有意義な知見を含み，集団間関係の基礎的研究として高く評価されよう。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。